

LOH 症候群

(Late-Onset Hypogonadism : 加齢男性性腺機能低下症候群)

朝立ちも若い時の旺盛な元気もなくなり、体力、記憶力は激減、動くとき筋肉が痛みだす。年齢のためか諦めつつも焦りが辛い。午後になると顔がのぼせ上半身が火照る。他人と会話は出来るが、一人になると思考力が停止。これが日本的な LOH 症候群の症状でしょうか。既にこの概念が欧米で提唱されてから 20 年近く経っており、日本へ導入されてからも 10 年を経ています。いまだに我が国ではその概念が一般にも専門医にも正確に掴めきれていない状況を説明したいと思います。

欧米での解釈は明快で、“加齢に伴う血中男性ホルモンの低下と多臓器機能低下の諸症状により特徴づけられる臨床的・生化学的な症候群”をその定義としますが、要は“血中の男性ホルモン（以下 T とします）値が年齢の低下に見合った程度に保たれていれば、あの男は年をとったがまだまだ元気という程度でいられる。でも、標準以上に T 値が低下してしまうと、身体的にも精神的にも仕事の遂行能力が衰え、そのことがその男性の人生を終わりにしてしまう”という考え方です。それ故、精巣が T を産生する能力に欠けてくるならば、外部から補充してあげることで賄える筈、なおかつ終生補充し続けられれば、晩年を力強く生きることが出来ると考えているのです。

問題は、日本人にはこの理論が単純に当てはまらない事です。精巣より産生される T の値が日本人においては、教科書にあるような経年的な漸減がはっきりとは認められない事が判ったのです。高齢でも高い T 値を持つ方や青年なもののより低い T 値の方が存在し、その値に関わらず元気な人も元気がない人もいる事が判り、LOH 症候群の症状と T 値が合致しない事も判りました。その解決策として全体の T の 1% 程しかない遊離テストステロン（free Testosterone : 以下 fT とします）の値を日

本では診断のために採用したのです。詳細は省きますが、日本人において経年的な漸減が認められ、保険診療も認められる fT を採択する事により、日本人の LOH 症候群に対する男性ホルモン補充療法（ART : Androgen Replacement Therapy）が開始されたのです。

この後に生じた問題が、欧米では、高齢の特に 70 歳以上の方に T 値の低下が生じる方が多いのに対し、我が国では、比較的若い方（50 歳前後）が、特に男性更年期障害や鬱病と診断された方が多く受診された事です。この方達は、以前にはいわゆる Middle Age Crisis と呼ばれた、肉体的変化（aging）にストレスが加わる事から精神的～肉体的に疲弊してしまい、遂には気力も失せてしまった方達と考えられます。当然、病気の成立機序から考えても、あるいは使われた薬剤によっても、視床下部の機能低下が起こっているものと考えられ、殆どの方が T も fT も低下していました。そのため、多くの専門外来で半ば試験的に治療が行われ、結果としてその方達に対する ART の治療効果が（勿論すべての患者さんではありませんが）確認されました。つまり、この事実はこの疾患の好発年齢が日本人においては二相性であるということの意味し、この事から欧米の如く一律に終生 T を補充し続けるという考え方が我が国では今でも否定的な理由です。

まだ多くの解決すべき問題が残されていますが、以上を踏まえて日本人に合った概念を確立し治療法を見直す作業の必要性がやっと言われ出した処と考えています。

港 南 区 医 師 会
横浜市港南区港南中央通 7-29
港南区休日急患診療所
診療日 日・祭・年末年始
診療時間 午前 10 時～午後 4 時まで
電 話 842-8806